プロジェクト最終報告書 Web 用要旨（1/1）　　15W2113001C　大谷萌恵

日本とパラオの歴史的関係性の検証
−親日の背景を探る−

事例研究Ⅰ　松野良一ゼミ　3 年
大谷萌恵

＜研究目的＞

リゾート地として多くの観光客が来訪するパラオ共和国。「世界一の親日国家」と称されるほど日本に友好的な国という側面を持ち、他方、日本に統治された経験を有する国でもある。

日本の統治下にあったことによってパラオはアメリカ軍の侵攻の標的となり、パラオ人の平穏な生活を崩壊させたほか、日本政府による徹底した皇民化政策によって、日本人としての教育が強要されたという史実がある。本プロジェクトの目的は、このような反日感情を誘発するとも考えられる事柄が、実際にパラオ人の心情にどう影響を与えたのかについて、日本統治時代を経験したパラオ人や日本人への聞き取り調査及び歴史的事実の検証を通して明らかにすることである。

＜取材場所（取材対象者）＞

(1)宮城県蔵王町北原尾地区 2017 年、8 月 3 日実施（工藤静雄さん）

(2)駐日パラオ大使館・JICA 地球ひろば主催・月間特別展示関連パラオセミナー」、2017 年 9 月 25 日実施

(3)パラオ共和国、コロール島及びペリリュー島、2017 年 10 月 3 日〜8 日実施（ミノル・ウエキさんアントニオ・ニナさん・村上ひとみさん・パラオコミュニティカレッジの学生、18 名。）

＜結論＞

本プロジェクトで設定した「統治されながらも、なぜパラオ共和国は親日であるか」という問題について、調査結果から、次の 2 点を指摘した。

一つ目は、日本の精神教育が、パラオの伝統的な役割分業制の中で培った精神と相通ずるものであり、パラオ人にとって自然と許容できるものだったこと。そして、日本の教育によって、パラオ人の生活に規律が生じたことが肯定的に受け入れられたという事実である。

二つ目は、島国で生活するパラオ人にとって外部から人や物が入ることは日常的であり、外部に対し自らが柔軟に変容してきたという国民性が多分に見受けられることである。こうした特性が日本の統治下においても作用し、更には、日本による統治が結果的にパラオに文明の発展に寄与した。このため、「統治者が人民を支配し、治める」といった統治構造のイメージがパラオでは根付かず、むしろ受容された形となったと考えられる。